



川面に最後の景観

眼鏡橋 来月から解体移転

【長崎】さきと國の歴史文化財に指定され、長崎公園内に復元され

「はよよと」百廿口から解体作業に着手することになり、四、五千年来にわたって親しまれてきたこの橋も本明川から松を流すことになった。

二十一年の大空襲を被ったにせよ、この眼鏡橋の下部構造については、解体責任者の本明川工事事務所をはじめ各界の関心を集めていたが、同事務所の調査によれば、眼鏡橋の橋脚の根入りは水面から僅かに二、四七センチ、五センチから七センチに及んでいる。近世橋の根入りは比へて想以上二、三メートルは同様に橋脚も高さの根をみはつていゝ。また橋脚は水面から川底に向つて一、二メートルにわたりコンクリートで固められ、次に厚さ三、四センチの松の丸がはかれてある。その下を更に三、四センチのつくし、いしものと八十センチにわたる黒色のねん土で固めがしてあるが、コンクリートは明治時代に補強されたものとみられる。

遊で約七百ト推定されている橋の重量による変位も、解体工事の約一月を予定、解体移転の運びとなつてゐる。また、長崎公園内開き所開き地に運ぶことになつてゐる。以上は解体開きの関係。